【ねがいましては】

平成３０年４月２５日　　*KYOWA SCHOOL*
第３３０号

「減点法」

いつでしたか、「日本人が英語が話せない最大の原因は、学校教育にある」とどなたかが言っていました。そのわけとして、減点法が良くないと言うことだそうです。

日本では当たり前となっている減点法（１００点を頂点として、そこから誤答分を減じていく）、その方法だと、英語を話そうとしても間違えることに恐怖心が湧き、なかなかことばが出てこなくなってしまうのだそうです。

たしかに目の前の相手に自分の感情を少しでも早く伝えようとするときは、主語→述語などと、考えている暇などありません。とにかく単語を並べる・・・。そして相手の目を凝視し、訴える・・・。「え一文法だと」・・・などと悠長な態度はとっていられません。

英語は言語、『目の前のひとに伝える』が成功すれば良いわけで、そこまで行き着くのに、何をどうしゃべろうとかまいません。目の前のひとは首をかしげながら、「えっ」「えっ」・・・。やがて、「そうですか。」と、伝わるときが来る。その時のうれしさや・・・。で、伝わるまでどのくらい間違えたの・・・数え切れないくらい・・・。といった感じです。きっと、これをお読みになっている方も、赤ちゃん時代へさかのぼれば、あっちこっちと、ことばを取り間違えながら今に至っているはずです。

でも、今の教育制度の常識にあてはめると、どうやら減点法が当たり前・・・。で、犠牲になるのは子どもたち。

英語の発音にしても、小さな声しか出せない子がほとんどです。全員で発声するときはあれだけ大きな声を出していたのに、ひとりで発声するとなると・・・。「あれっ、声出てるの？」・・・間違えたらどうしようという減点法特有の恐怖心がすべてを覆ってしまうのです。

前回の本田宗一郎さんの名言、「成功とは９９％の失敗に与えられた１％だ」同様、失敗を恐れず、なんだかんだと、ことばを並べ続けた結果通じたわけですから、それは大成功だと言えます。しゃべったひとは、その達成感に感動し、ますます前向きに取り組み始める・・・。好循環の現れです。

教育とは、そのようなところに重点を置くべきではないでしょうか。まず失敗から始める。失敗からスタートするわけですから、それが当たり前、だれも誹謗中傷するものはいません。そして答えが合う確率もとても小さい、これも当たり前。それが学ぶこと、それが勉強、様々に考え、様々に立ち止まり、様々に跳ね返され、のたうちまわったあげくにやってくる成功・・・。それが学校という場なのだ・・・。

テストがあっても、全部できると１００点は必要ないと思います。これは採点者側の都合であり、保護者側の都合なのかもしれません。本人にとっては「不安の助長」が大きく、「やる気の助長」は少数派なのかも・・・。

子どもたちは、合う合わないにのみに固執します。ですから、選択問題などは必ず分からない場合、くじ引き解答を行います。「どれにしようかな、神様の言うとおり・・・これにしとこ。」そしてテスト返却、「やった、合ってた。」

学びでも何でもありません。「オレって神がかってるじゃん。」で、一件落着。

「今日、これ学んだら次がどうなってるかますます知りたくなっちゃった。」「この問題が解けた、で、もっと難しい問題ないのかな。」すべて前向きな心があります。そのような前向きに生きようとするこころを育むことこそが、学びであるはずです。そんなこころをくすぐってあげることが、我々大人や教育に携わるものたちの努めではないでしょうか。

ここ（ＫＹＯＷＡ）は学年撤廃です。ある学年では、ここまで・・・。というのは文科省が作成した学習指導要領のこと。そのレールに従い、学習を進めていく場が学校です。子どもたちの持っている、向上心や探究心は計り知れないものです。だったら行けるところまで行ったろかというのがここでの取り組み。算数の計算にしても、分数・小数の計算が終了すると、すかさず「数学やってみる？」と、誘惑します。目が輝き始めます。こころが前を向いている証拠です。そしてはじめた数学、中学１年の正負計算・文字式計算・方程式計算、それが終了すると、２学年の数と計算・連立方程式計算、それが終了すると、３年生の展開・因数分解・平方根の計算などなど、どんどん進みます。気がついたら、中学校３年間全ての計算分野が終了します。それでいいと思っています。

その子の前向きな気持ちが今までにない続き方をしたのですから、立ち止まることなく歩み続けることができた、その事実が、その子に自信と勇気を宿したことになります。「ひょっとしたら、私って結構やれるひとかもね。これからも何でもこつこつ取り組みつづけてみよっと。」

その子にとっては、こつこつと勉強に取り組むことで努力すれば何とかなるものだ、という諦めない気持ちや継続する気持ちを手に入れたのです。大人になってから必ず必要とする「こころの土台」を手にしたのです。山を登り切ったぞという達成感を手にしたのです。まさに、「人生」という長い旅路をみごとに成しきったという達成感に近いのかもしれません。そこにはテストはありません。評価もありません。生きることの真の意味を感じ取った方だけが感じることのできる満足感だと思います。